

Hondaの交通安全情報紙



Since 1971



Safety for Everyone

Hondaはすべての人の交通安全を願い活動しています。

編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1
TEL 03(5412)1736
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/
編集人：吉田宏樹
※年間購読をご希望の方は、下記までお問い合わせください。
(株)アストクリエイティブ 安全運転普及本部係
TEL 03(5439)1191 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp



SJホームページは ホンダ SJ 検索

CONTENTS

- 特集●ホンダ輸送グループの安全活動
物流のリーダーとして、事故ゼロの実現をめざす……1
教育最前線/ボラグループ……4
現場訪問/生活クラブ連合会……5
TOPICS/Honda春のセーフティキャンペーン……5
STREAM/全国に広がるHondaの高校生交通安全教育活動 第9回……6
危険予測トレーニング(KYT)/右側の車線に進路変更する時(四輪車編)……7
指導者ファイル/徳島県の交通安全教育指導員でつくる「ひまわり劇団」の皆さん……7
SJクイズ……7
SAFETY FOCUS/大阪府大阪市……8

特集●ホンダ輸送グループの安全活動

物流のリーダーとして、事故ゼロの実現をめざす

クルマの輸送を担う陸送会社では交通事故を防止するため、乗務員への安全運転教育をはじめ様々な取り組みを展開している。こうした中、Honda製品の輸送を手がける(株)ホンダロジスティクス、ホンダ運送(株)、日本梱包運輸倉庫(株)の3社は平成26年に加害事故0件という結果を残した。この3社はホンダ輸送グループとして、協同で事故防止に取り組んでいる。今回はホンダ輸送グループと業界団体の安全活動を紹介する。



ホンダ輸送グループの乗務員が運転する全長17mのキャリアカー



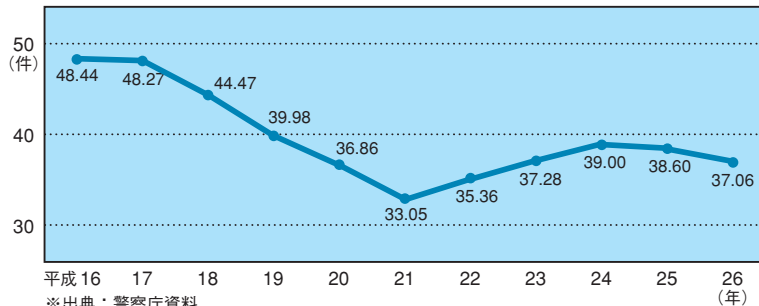
(株)ホンダロジスティクスで活用されているHonda動画KYTとHondaセーフティナビ。動画KYT(写真左)は、実際の交通状況を再現した動画を見ながら危険を予測し、結果を受講者同士が振り返って議論することで安全を学ぶことができる。セーフティナビ(写真下)はパソコンを使用し、市販のステアリングなどと組み合わせることで、簡易型シミュレーターとして手軽に使用できる教育機器

警察庁の資料によれば、平成26年の当事者種別(第1当事者)交通事故件数をみると、事業用自動車(バス、タクシー、トラック等)による事故は3万9649件である。このうちトラック等の事業用貨物車による事故は2



万2906件と半数以上を占めており、事業用貨物車の1億走行キロ当たりの事故件数は37.06件だ。こうした状況の中、(株)ホンダロジスティクス、ホンダ運送(株)、日本梱包運輸倉庫(株)の平成26年の加害事故は0件で、被害事故もわずか3件にとどまっている(3社合計の延車両数は約2万台、延走行距離は1億3173万km)。

●事業用貨物車(第1当事者)1億走行キロ当たりの交通事故件数の推移



●ホンダ輸送グループ安全協議会と各社の取り組み概要

ホンダ輸送グループ安全協議会

- 地区部会(狭山、浜松、鈴鹿、熊本)での定期的な安全パトロールの実施
鈴鹿サーキット交通教育センターなどのドライバー研修、管理監督者研修の開催
3社およびそのグループ会社・協力会社を対象にした交通安全標語・ポスターの募集と表彰

(株)ホンダロジスティクス

- 安全運転適性診断車(DSS)を活用した乗務員への教育
Hondaセーフティナビ、動画KYTの導入による社内の安全教育の拡充
Hondaパートナーシップインストラクターを養成し、事業所周辺地域で交通安全を普及

ホンダ運送(株)

- 全社員参加による無事故・無違反チャレンジコンテストの実施
安全担当者、運行指導員による3ヵ月ごとの乗務員への教育
点呼時の班長からの運行指導(社員による自主的活動)、乗務員同士による運行ルートに関する注意点の共有

日本梱包運輸倉庫(株)

- 乗務員の入社時および入社6ヵ月後の研修の充実
社内でのヒヤリハット体験の募集と共有
営業所ごとにドライバーコンテストを開催

協議会では、Hondaの拠点がある狭山(埼玉県)、浜松(静岡県)、鈴鹿(三重県)、熊本(熊本県)の4ヵ所に地区部会を設けている。地区部会では3社合同で定期的に危険個所の安全パトロールを実施している。協議会では、Hondaの拠点がある狭山(埼玉県)、浜松(静岡県)、鈴鹿(三重県)、熊本(熊本県)の4ヵ所に地区部会を設けている。地区部会では3社合同で定期的に危険個所の安全パトロールを実施している。

3社でつくるホンダ輸送グループ安全協議会(以下、協議会)の設立は昭和45年。合同でプロとしての「事故撲滅」「安全運転率先垂範」に立ち上がり、前身となる「ホンダ輸送グループ安全普及委員会」を発足したことに始まる。そして、翌年から交通事故「ゼロ化」を目的として、ホンダ輸送グループ内での年間無事故競争をスタートさせた。

競争しながら、お互いの良いところを学び合う

※延車両数=月毎に使用した車両数(ナンバープレートの数)の12ヵ月累計





Honda輸送グループ安全協議会会長を務める  
(株)ホンダロジスティクス取締役の秋山敏明さん

新しい道路ができたり、季節や時間帯によっても道路の状況は変化する。そうした変化に適切に対応することで、少しでも事故のリスクを下げるのがねらいだ。「グループ」といっても、3社で企業文化は異なります。そのため、安全パトロールで指摘するポイントが各社で違うケースもあります。これは、お互いが自社にはない視点や考え方を学べるチャンスといえるでしょう。競い合うだけでなく、こうした機会をつくれることも、3社合同で行うメリットの一つだと思っています」と秋山さんはいう。

協議会全体で取り組む活動には、鈴鹿サーキット交通安全センターでのドライバー研修や管理監督者研修、交通安全標語・ポスターの募集と表彰などがある。「交通安全センターでは、急制動などを参加者に体験してもらいます。この時のクルマの挙動を感じることで、日頃運転している大型車で急ブレーキをかけた場合の危険が想像しやすくなるのです。ホンダの質の高い安全運転教育を受講できるのは、たいへんありがたいと思っています」。

交通安全標語・ポスターの募集は3社とそのグループ会社・協力会社の社員を対象に行っている(ポスターは社員の家族も対象)。平成26年は標語が7000点以上、ポスターが350点以上の応募があった。優秀作品の応募者は表彰され、標語の場合は最優秀作品を印刷したのぼり旗(ポスターの場合は優秀作品を印刷したカレンダー)を制作し、それらが1年間、各職場に掲示される。

こうした協議会の活動以外にも、3社は独自に交通事故防止に取り組んでいる。

## (株)ホンダロジスティクス 乗務員の教育に活用

乗務員の教育にホンダの安全教育機器を活用しているのが、(株)ホンダロジスティクスだ。同社は平成13年、社会との共生を図る物流企業として「交通事故撲滅」に向けた取り組みを強化。その一環として、「乗務員の運転適性の把握」「危険予測能力の向上」「社内の安全意識の活性化」「地域社会への貢献」を目的に、安全運転適性診断車(ドライビング・シミュレーション・スペース、以下、DSS)を導入した。このDSSが全国の事業所を巡回し、各事業所に配置された社内インストラクターが安全運転指導に活用している。乗務員およびクルマで通勤する社員など、毎年400〜500名が受講。同社だけでなく、グループ会社や協力会社も対象にしている。

同社技術本部安全品質環境部長の高城健一さんは「DSSにはホンダドライビングシミュレーターと、アクセスチェッカー(加齢などによる身体機能の低下を把握する装置)を搭載しています。体験的な教育を繰り返してできるようになり、座学だけの教育に比べ効果的で、高い安全意識の維持・継続に寄与しています」と話す。DSSは各地域の交通安全イベントにも利用するなど、「地域の事故撲滅」に向けた安全活動にも活かされている。

このDSSだが、大型トラックである



(株)ホンダロジスティクスの安全運転適性診断車(DSS)

ため、全国各地に移動させるには時間がかかる。つまり、参加人数が限られてくるのである。そこで、より多くの乗務員や社員が受講できるように昨年4月、ホンダセーフティナビ4台とホンダ動画KYT1台を新たに導入。どちらもコンパクトであるため、同社の物流網によって全国各地へすぐに届けることができるようになり、平成26年は半年間だけで700名以上が受講した。

「セーフティナビは、自分の運転の苦

手な部分などがわかりやすいと好評です。運転反応検査のソフトも入れているので、これを2〜3年に1回実施する乗務員の一般検診に活用しています。一方、動画KYTは社内インストラクターと受講者相互が安全に対するコミュニケーションをとりながら、進められる点が良いと思います。乗務員のミーティングで活用されるなど、社内のニーズが高いので、平成27年度は3台追加導入することにしました」と、高城さんはセーフティナビと動画KYTについて評価する。

「昨年、組織を改編し、輸送事業所という部門を立ち上げました。文字通り輸送に特化した組織です。これによって、安全を含めた輸送の品質向上にきめ細かく対応できるようになりました。この他、社外の安全活動として、ホンダ・パートナーシップインストラクター(HPI)の養成も行っています。現在、HPIは10名で、各事業所内および周辺地域における交通安全普及に取り組んでいます。こうした様々な積み重ねが、加害事故0件を達成できた要因だと思います」。

## ホンダ運送(株) 乗務員が自主的に 安全活動を推進

ホンダ運送(株)でも社員が一丸となって事故防止に取り組んでいる。乗務員の連続無事故表彰(3年・5年・10年)を行っているが、交通・商品の無事故に加え平成23年から「交通違反ゼロ」とい

う条件を加えた。また、平成7年から大阪府警察本部が行う「無事故無違反チャレンジコンテスト」に本社が中心に参加していたが、平成10年からは対象者も役員、管理職を含む全社員に拡大。さらに、平成22年からはアルバイトも対象とした。「これが会社全体の安全意識を高めてきつかけとなり、事故や違反が激減、社員においてはほとんどなくなりまし」と、同社管理本部安全品質部長の浅野晋一さんは話す。

同社は、乗務員の世代交代の時期にあたっており、近年、新たに入社してくる乗務員が多い。そのため、乗務員としての経験と知識が豊富で指導力がある人材を安全担当者として、乗務員の教育に専任させている。安全担当者は運行管理者でもあり、安全最優先を実践するリーダーの役割を担っている。また、各営業所には運行指導員を配置し、乗務員のコーチ的な役割を果たしている。安全担当者と運行指導員は連携し、随時、研修を実施している。「従来は2カ月の研修で見極めて立ち上げていましたが、現在、新人乗務員(1年未満者)には3カ月ごとに定期的なフォロー研修を実施しています。この他、年2回、荷主ごとに決められたルール、社内のルール、交通法規を冊子にして、勉強会を開催し、最後に知識テストを実施しています。安全運転技術の向上に関しては、ホンダ輸送グループ安全協議会のドライバー研修、全日本トラック協会やトラックメーカーが主催する研修に乗務員を派遣するなど、外部研修を活用しています」。

加害事故0件を達成できた要因とし



ホンダ運送(株)では乗務員が点呼の際に運行管理者だけでなく、班長と運行ルート上で注意すべきことを確認している



ホンダ運送(株)で年2回実施される勉強会

て、乗務員が事故を未然に防ぐために何をすべきか考えるようになってきたことと、同社の組合の多大なる協力を浅野さんは挙げる。「通常、運行前の点呼は安全担当者(運行管理者)と乗務員とで行います。ただし、運行ルートに関する最新情報を持っているのは同じ乗務員です。現在、自主的に乗務員5〜6名で1つの班をつくり、各班の班長が担当乗務員の出発前の始業点呼に立ち会う活動が行われています。工事等で車線規制が行われている箇所など運行ルート上で注意すべきことを伝達しているのです。班長も各乗務員から情報を収集し、点呼以外にも班全体で共有できるように努めています。乗務員同士がコミュニケーションをとる機会が増え、チームワークを高める効果も感じています。特に、班長役の乗務員には大きな負担がかかっているのですが、これは本社の安全課が主導したわけではありません。輸送の品質を高めるため、乗務員一人ひとりが安全で安心して働ける環境を自分たちで創ろうという意志の表れではないかと思っています」。

## 日本梱包運輸倉庫(株) 安全運転意識・技術の 向上により、プロフェッショナルの 自覚を促す

平成26年に加害事故0件、被害事故0件の両方をクリアしたのが、日本梱包運輸倉庫(株)である。同社品質安全管理部部長の山崎敬司さんは「創業以来、私たちは『運輸の公共性にこたえ社会の繁栄に寄与する』ことを信条に輸送の安全に取り組んでいます。公共の道路を利用して事業を行ってまいりますから、そこで事故を起こしてはならないという意識を乗務員全員に持ってもらうことが大切です。そのため、品質安

※点呼＝乗務前において、運行管理者等が、運転者からの報告、顔色等の観察、アルコール検知器の使用等により、酒気帯びの有無、健康状態、事業用自動車の状態等を確認するとともに、安全確保のため必要な指示を与えるもの。



# 特集●ホンダ輸送グループの安全活動

全管理部門の中に安全運転研修センターという専門の部署を設け、乗務員の研修には特に力を入れています」と話す。

新たに入社した乗務員は、A研修とB研修を受講しなければならぬ。A研修は入社時に行われる3日間の研修。内容は座学(社内規則・道路交通法・労働時間等の改善基準など)、運転実技、整備点検。この後、配属された営業所で1ヵ月間、運行管理者のもとで添乗指導を受け、独り立ちする。B研修は入社6ヵ月目に実施され、これまで学んだことの振り返りを行う。

品質安全管理部では随時、社員から自分が体験したヒヤリハットを募集している。毎月平均150件集まるそうだ。それらを取りまとめたものを営業所に配付。各営業所では月1回、乗務員を対象に事故防止会議が開催されており、この時にヒヤリハットの題材を使ってKYTを実施している。

また、プロドライバーとしての運転技術向上を図るため、営業所ごとに年1回、ドライバーコンテストを開催。セミトレーラー、大型車、中型車、フォークリフトの4部門に分かれ、それぞれ学科、実技、点検の3項目で評価する。内容は、全国トラックドライバー・コンテスト(主催…(公社)全日本トラック協会)に準じている。例えば、実技ではバックでのパイロンスラロームなど高度な技術

## 高い安全意識を持つ キャリアアカーの乗務員

現場の乗務員は日々、どのような意識で取り組んでいるのか、3社を代表して(株)ホンダロジスティクス輸送事業所製品輸送部埼玉製品輸送課の濱崎竜次さんに話をうかがった。濱崎さんは平成6年から20年以上にわたりキャリアアカー(四輪車を輸送するトレーラー)の運転を続けており、1年間に約10万km走行している。

「乗務員のミスは事故という形で残り、それは消すことができない」――濱崎さん

が求められる課題となっている。ここで優秀な成績を収めた乗務員は事業部の代表選考に進む。今年も事業部の代表92名が5月に埼玉狭山市で行われる日本梱包運輸倉庫グループ運転競技大会に出場することになっている。

「『できる』と思っただけでも、実際にやってみると上手くできないことがあります。そうしたことに気づいてももうことがねらいです。乗務員一人ひとりが自分の運転技術を客観的に確認できる良い機会になっていきます」と山崎さんはいふ。高い運転技術を身につけることが、プロドライバーとしての自覚を持たせ、安全意識を高めることにつながっているようだ。



日本梱包運輸倉庫(株)の全営業所で行われる年1回開催されるドライバーコンテスト。セミトレーラー、大型車、中型車、フォークリフトの4部門ある



は乗務員となった時に上司から言われた言葉が忘れられないという。常に行動面で心がけていることは「車間距離(時間)を2秒以上とる」「制限速度を守る」「必要以外の車線変更はしない」。これらを確実に実践することで、できるだけ自分から危険な状況をつくり出さないようにしている。

キャリアアカーの積荷は、工場で生産された商品車である。それを販売会社や港など指定された場所に運ぶわけだが、この商品車1台1台の積み下ろしも乗務員が担当する。「乗務員を始めた頃は、運転以上に商品車の取り扱いに気を遣いました。積荷を傷つけず、安全に目的地に運ぶことが重要です。走行中でも常に商品車の状態に



(株)ホンダロジスティクス輸送事業所製品輸送部埼玉製品輸送課の濱崎竜次さん。制服の袖には150万km無事故の証である「SAFETY DRIVER 150」というワッペンが付いている



気を配っています」。

また、自分では行ったことのない目的地に向かうこともあるそうだ。そういう場合は地図を使ってルートを確認したり、行ったことのあるドライバーの話聞きながら、注意すべき交差点など、ルートの状況を把握しておく。「今でも初めて走る道路は緊張します。決められたルートでも実際にいったら通行止めになっている可能性もある。周辺の道路状況も含め、事前の確認は十分に行うよう心がけています」と、慌てて焦る状況をつくり出さないための工夫をしている。「そのように準備をしても、私も時間がなくて焦ることはあります。その時、『ここが大事!事故を起こしたら、もっと遅れて迷惑をかける』と冷静になるように自分に言い聞かせるようにしています」。

濱崎さんは乗務員となってから150万km以上無事故を継続している。その証として、制服の袖には「SAFETY DRIVER 150」というワッペンが付いている。「このワッペンに手を当てることで、プロドライバーとしての責任を再確認し、『絶対に事故を起こさない』という強い気持ちで集中力を継続できるようにしています。自分が無事故であることが、会社全体での事故ゼロの継続につながると考えています」と、濱崎さん

## ホンダの安全文化を 陸送業界の発展に活かす

んは無事故キロ数200万kmをめざす考えだ。

陸送業界の業界団体では、どのような安全活動を展開しているのだろうか。ホンダ輸送グループ3社も会員となっている(一社)日本陸送協会の取組みを紹介する。

同協会は昭和40年に当時の運輸省の認可を受けて設立。自動車の製造と販売を結ぶパイプ役として日本のモーターリゼーションと陸送業界の発展に貢献してきた。設立時に70社だった会員企業数は現在715社。平成27年度から同協会会長に(株)ホンダロジスティクス代表取締役社長の永井高志さんが就任している。

「当協会では設立以来、輸送の安全は陸送事業の重点課題の1つと位置づけ、道路交通網や業容・業態の変化、キャリアアカー構造の変化など、その時代の背景にそった『安全』への取組みを継続的に実行してきました」と、永井さんは話す。「輸送の安全を誰がまっとうするのかという点、それは『人』です。そのため、ドライバーやインストラクターの人づくりが安全の品質を高めることにつながります。それには一人ひとりに安全意識を浸透させ、それを維持していくことしかありません。教育体制の確立や労働環境の改善など、事故防止に向けた環境を整備することが当協会や会員企業の経営者の役割だと考えています」。同協会では現在、交通防止活動の1つと



(一社)日本陸送協会では全国9支部で「ゴールドドライバー」認定を実施している



(一社)日本陸送協会会長に就任した(株)ホンダロジスティクス代表取締役社長の永井高志さん

して「教育認定制度の充実・推進」に取り組んでいる。具体的には、ドライバー(自走・積載)に対する「ゴールドドライバー」の認定制度(後援…国土交通省)である。ドライバー・運行管理者に対し、同協会発行のテクニカルガイドブックを用いた座学と、キャリアアカーを使った実技を行い、教育実施の効果測定の結果で認定するものだ。平成23年から全国9支部ごとに実施しており、これまで429名(ドライバー410名・運行管理者19名)を認定した。

「陸送業界の先人がつくり上げてきた安全に対する歴史や文化、施策は踏襲しながら、現在の時代背景をふまえ、さらに進化した『安全施策の実行』が必要だ。そして、取組みの定量的な目標値を定め、それを約束事として社会に対し発信していくことも必要だと思っています。こうしたコミットメントが会員企業の結束を強化し、個々人の意識を高揚させることにつながるでしょう。ホンダおよびホンダ輸送グループの安全文化を加えていながら、安全で社会に貢献できる陸送業界へと発展させていきたい」と、永井さんは今後への抱負を語った。

ホンダ輸送グループ安全協議会会長の秋山さんは「3社ともに、事故はゼロで当たり前という認識です。ホンダ輸送グループとしても、早期に加害事故0件と同時に被害事故0件も達成し、さらにそれを5年以上継続させていきたい」と、高い目標を掲げている。ホンダ輸送グループが業界における安全のリーダーとして活躍されることがより一層期待される。



教育最前線

連載 35

●ポラスグループ

職場ごとに行うKYTによって、社員の安全意識を高め、事故防止につなげる



平成3年から毎年開催している「安全衛生大会」には、ポラスグループの社員も参加。最前線に、「ポラスグループ完全ゼロ災害でいこう！ヨシ！」と全員で唱和する。

グループ各社のすべての

絶対によめない」という社長の強い決意があったからです」と小玉さんは話す。現在、ポラスグループ内で活動しているKYTトレーナーは180名(20代後半から30代が中心)。グループ24社の各部署(課単位)に最低1名は配置されている。部門責任者以外の社員で、「役職社員または入社4年以上」「直近1年以内に交通事故や交通違反を起こしていない」等の条件を満たした者がKYTトレーナー研修を経て任命される。

また、新卒や中途で入社する社員を対象にKYT研修会を開催し、ゼロ災害運動の理念を理解してもらい、KYTの考え方を習得できるようにしている。「KYTの考え方を身につけることで、仕事の幅も広がります。相手側の立場で考える力を身につけることは、お客様からのクレームをなくすこ

社員は、毎月最低4枚、運転や業務の場面で自分が体験したり、目撃したことをもとに「ヒヤリKYシート(右写真参照)」を作成し、KYTトレーナーに提出している。このシートを毎朝5分程度実施している「ショートタイムKYT」で活用するため。さらに、KYTトレーナーは毎月1回「自主KYT」を実施している。内容は外部講師を招いての安全講話、インターネット上に公開されているドライブレコーダーの映像をもとにした事故事例研究、災害防止をテーマとする討論会など、文字通りKYTトレーナーの自主性に任されている。グループ各社、部署によって業務も異なるため、その職場に最適なKYTができるようにしているのだ。

小学生へのKYT教育では、「ショートタイムKYT」の手法を用いて児童に普段利用している通学路に潜む危険を考慮してもらい、1クラスをいくつかの班に分け、班ごとにKYTトレーナー1名が指導にあたる。「子どもたちが何か行動を起こす時にそれは安全なのか立ち止まって考えるきっかけになれば」と小玉さんは願う。題材となる交

通場面は、事前に各学校の通学路の状況をイラストにして用意しているそうだ。「子どもたちの発想は豊かですから、大人が思いつかないような危険を見つけることにもあります。担当するKYTトレーナーにとっても新たな気づきがあり、指導者として成長する機会にもなっているようです」。この取組みは小学校の先生方にも好評で、平成13年に1校からスタートし、現在は市内15校で行われている。この他、ポラスグループでは法定安全運転管理者に加えて、各社各部門をプロックごとに社内安全運転管理者を約70名任命し、社員への安全運転指導体制を充実させている。また、交通安全センターレインボー埼玉などを利用して効果的な安全運転教育のノウハウを取り入れている。こうした地道な取組みによって、同グループの事故や労災は確実に減少している。「しかし、まだゼロではありません。これからも通勤中、業務中、プライベートを含めた「24時間トータルゼロ災害」の実現に向けて、活動を継続していきたい」と小玉さんは力強く語った。



ポラスグループの取組みは安全活動の好事例として、昨年11月に交通安全教育センターレインボー埼玉・和光が企業・団体の安全担当者を対象に開催した「2014トラフィックセーフティ・フォーラムin埼玉」で紹介された



越谷市内の小学校でのKYT教育。児童に行動目標を唱和してもらい。題材となるイラストは通学路の状況を描き起こしている

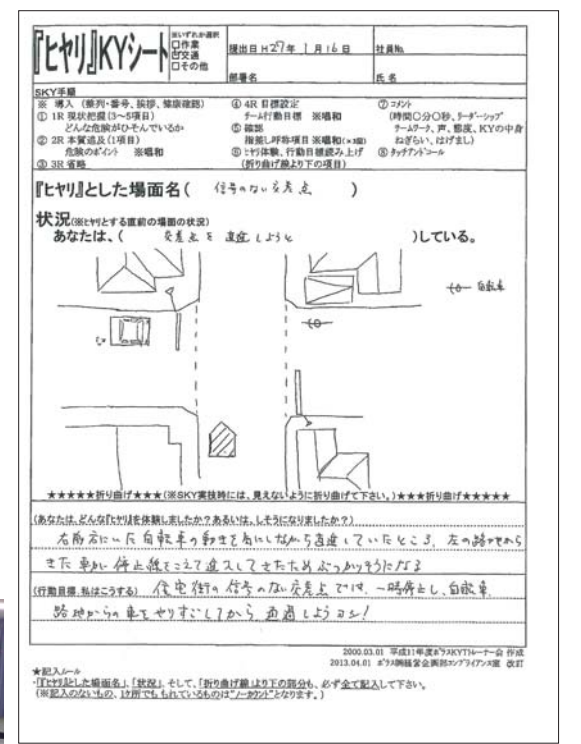
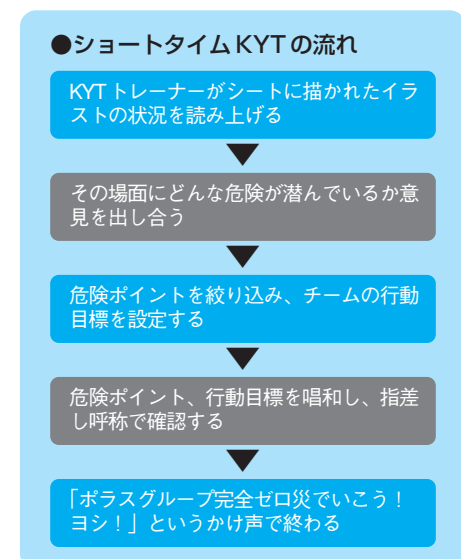
社員による交通事故は経営者の責任

ポラスグループは直営一貫施工体制で高品質の住宅づくりを実現するなど、住宅・不動産・建設に関する事業を埼玉県、千葉県、東京都を中心に展開している。グループの中核となるポラス(株)、(株)中央住宅、ポラテック(株)をはじめ、グループ会社は24社におよぶ。同グループで使う車両は軽自動車から4トントラックまで多様で、営業エリア内では毎日約1700台が動いているため、グループ全体で安全活動に力を入れている。

日々のKYTの継続で社員が効果を実感

「最初は多くの社員がKYTに懐疑的で、『やらされ感』で続いているという感じでした。しかし、確実に交通事故件数は低減し、10年かけて半減させることができたのです。KYTの効果を実感できたことで社員一人ひとりの意識が変わり、積極的に取り組むようになりました。粘り強く継続できたのは、『事故や労災をなくすために、

認KYTインストラクター・人見幸二郎さんとの出会いでした」と振り返る。当時の社長であり、創業者の中内俊三さんは、人見さんを通じて人間尊重を基本理念とした「ゼロ災害運動」の考え方に触れ、交通事故や労働災害が起きているのは社員が悪いのではなく、経営者である自分に責任があることを悟ったという。すぐに、中内さんは「ポラスグループ・ゼロ災害運動キックオフ大会(第1回安全衛生大会)」を開催し、社内でKYTトレーナーの養成を始める。当初はKYTトレーナーと経営幹部、部門責任者が中心となって、KYTによる研修会を定期的に行った。



グループ各社の全社員が作成している「ヒヤリKYシート」。毎朝実施する「ショートタイムKYT」で活用されている

KYTトレーナー研修会をはじめ、新入社員や中途入社社員、新任マネージャーなどを対象にしたKYT研修会を行っている



# 安全・安心な消費材を日々、無事故で組合員に届けるために

生活クラブ連合会（生活クラブ事業連合生活協同組合連合会）は、21都道府県で活動する32生協の事業連合組織で、組合員数は約34万人におよぶ。各生協では職員がトラックを運転して、地域に住む組合員に毎週決められた日時に、食料・日用雑貨・衣料などの消費材を配送している。職員への安全運転指導は各生協で行っているが、同連合会でも年1回、新人（中途採用を含む）を対象にした安全運転研修を開催している。その目的を、同連合会総務部総務課の加藤正宏さんは次のように語る。「私たちの使命は、安全・安心な消費材を組合員の皆さんにお届けすること。ですから、それを運ぶクルマが交通事故を起こさないというのが大前提となります。新人の段階で、そうした安全に対する基本



2015年度新人安全運転研修には生活クラブ連合会の会員となっている生協から18名が参加

トラックの場合は、運転席の下にエンジンがあるため、インストラクターがキャビンの開け方から説明。冷却水、ブレーキオイル、エンジンオイル、タイヤ、灯火類などの確認方法を示す。そして、研修で運転するトラックを使って、受講者自身で点検を行う



的な考え方と知識・技術を身につけてもらうことがねらいです。毎年、各生協に案内し、受講者を募っています。

4月2日、3日の両日、交通教育センターレインボー埼玉で2015年度新人安全運転研修が実施され、18名が受講。1日目の実技は同センターの新コースが使われた。

最初は日常点検、正しい運転姿勢、トラックの死角。「乗車する時は必ず後方から左側面、前方へとまわり、前方の死角や車体の下に何も無いことを確認して運転席に乗り込みましょう。また、乗用車と違って、トラックは左後方の死角が目視で確認できませんから、サイドミラーでの確認回数を増やすことに対応してください」とインストラクターが注意を促す。

そして、受講者はトラックに乗車し、慣熟走行、パイロンスラロームへと進む。パイロンスラロームでは、あえて送りハンドルや内掛けなどを受講者が実践。そうした応用操作では、正しい操作（たすき掛け）に比べ、正確で素早いハンドル操作が難しいことを体的に体験してもらう。



送りハンドル、内掛けでのパイロンスラロームを体験してもらうことで、そうした操作では何が危険なのかを気づかせる



「乗用車と同じ感覚で、曲がり始めると車体の横にパイロンが接触します。トラックは乗用車より前に運転席があることを意識して、ハンドルを切りましょう。トラックは運転席から後方が見えませんが、切り返す時は後退する距離を最小限にとどめるようにすることが安全です」と、インストラクターがアドバイスした。

配送中の事故の多くはクルマをバックさせる時に起きていることから、2日目は車庫入れやバック

1日目の最後は車両感覚訓練。S字とクランクを繰り返し走行する。始めのうちは曲がりきれずに、何度も切り返しを行って通過していく。「乗用車と同じ感覚で、曲がり始めると車体の横にパイロンが接触します。トラックは乗用車より前に運転席があることを意識して、ハンドルを切りましょう。トラックは運転席から後方が見えませんが、切り返す時は後退する距離を最小限にとどめるようにすることが安全です」と、インストラクターがアドバイスした。

によるパイロンスラロームなど後退訓練に多くの時間が割かれた。「広々としたコースで、インストラクターの方のきめ細かい指導を受け、安全意识とともに、トラックの運転技術も高まったと思います。2日間で身につけたことを日々の配送業務に活かしてほしい」と加藤さんはいふ。



車両感覚訓練ではクランクとS字を繰り返し走行

## 交通教育センターレインボー埼玉に新コースが完成!



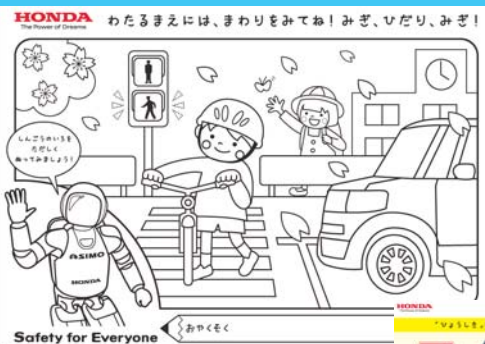
新コースは、4月1日より運用が開始されている。今回紹介した生活クラブ連合会の研修のように効果的な車両感覚訓練が実施できるほか、信号機のある交差点や一時停止標識のある交差点などが設定されているので、これまではできなかった法規走行訓練も可能になった。同センターでは、新コースを活用して企業研修など幅広いニーズに応えていきたいという。

# TOPICS ●Honda 春のセーフティキャンペーン 若年層への交通安全啓発を強化し、活動内容をさらに充実

## 交通安全ぬりえ ダウンロード

ホンダ 2015 セーフティキャンペーン

検索



「ぬりえ」といっしょに交通安全ポイントシートもダウンロードされる

ダウンロードした「交通安全ぬりえ」に色をぬって、家族で決めた交通安全の約束を書いたら、下記宛にお送りください。応募者全員にASIMO えんぴつをプレゼント! 【応募締切】6月5日(金)

〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1 本田技研工業(株)安全運転普及本部 交通安全ぬりえキャンペーン事務局行

※送付いただいたぬりえは、ASIMO えんぴつと一緒に返送します。 ※お申込みいただきましたお客様の個人情報は、発送業務以外の利用は致しません。

ホンダでは「春の全国交通安全運動(5月11日～20日、主催:内閣府ほか)に合わせ、4月11日～5月31日の期間、「2015年ホンダ春のセーフティキャンペーン」を実施している。テーマは「ホンダで働くヒトはクルマや地域(社会)にやさしい運転をめざします」交通安全のない明るい地域社会をめざして。

期間中は、ホンダ及びホンダ関連企業の従業員、販売会社のスタッフが一丸となって、自ら率先して交通安全を実践。また、販売会社を含むホンダ及びホンダ関連企業の事業所には、交通安全啓発の「のぼり」を掲示し、従業員・お客様・地域の方に広く交通安全を訴求する。

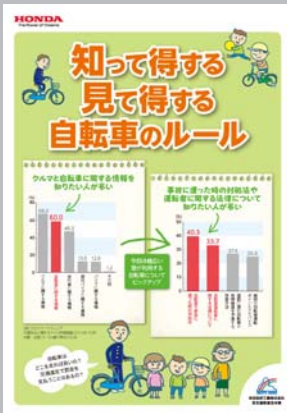
春は、新入学・新学期のシーズンとなるため、子どもなど若年層

の事故リスクが高まる時期でもある。そこで、今回は若年層への安全啓発に力を入れている。お子さまと一緒に交通安全について考えるきっかけとしていただけるよう「交通安全ぬりえ」とともに交通安全ポイントシートや「知って得する 見て得する 自転車のルール」などもダウンロードができるようになった。



小学1・2年生を対象にした「交通安全クイズ」(3・4年生用と5・6年生用もある)

保護者を対象にした「知って得する 見て得する 自転車のルール」







# 全国に広がるHondaの高校生交通安全教育活動 連載:第9回 学校が交通安全教育の指導を自ら 運営できるマニュアルの完成をめざして



実技は「8の字走行」「反応・回避」「飛び出し・停止」。このうちの2つを組み合わせて1時間(45~50分)でできるようになっている



**学校が主体となって活動を継続してもらうために**

高校生年代は、交通社会の一員として一層責任を自覚した行動が求められる時期である。将来にわたるため、ホンは生徒自身が交通安全について主体的に考え、自らが交通事故から身を守るようになるとともに、他の交通参加者への思いやりや譲り合いの心をも身につけてほしいと考えている。そこで、独自に教育プログラムを開発し、平成24年より関係行政機関の理解と協力のもと、高校生交通安全教育を開始した。これ



「8の字走行」「反応・回避」「飛び出し・停止」に代表される実技は、一方的に教え込むのではなく、体験や対話を通じて生徒自らが考え、加害者とならないための「安全確認の重要性」や、「人への思いやりの大切さ」を導き出せるように工夫されている。マニュアルでは実技それぞれについて、コース設定や進め方はもちろん、指導していただくポイントを明確にして、映像を使いながら、わかりやすく解説している。

## 人への思いやりの大切さについて生徒自ら考える

このマニュアルは、高校生の自転車による交通事故の防止を目的としており、収録されている教育プログラムは「実技」と「感受性教育」で、いずれも学校が主体的に運営できるような内容としている。今後、この内容をベースに、さらなる改善をめざし、検証作業を進めていく考えだ。

今回紹介した「高校生交通安全教育指導マニュアル」に関心をお持ちの先生、地域指導者の方は下記にご相談ください。

本田技研工業(株)  
安全運転普及本部  
TEL: 03(5412)1736

感受性教育は、事故を起こしてしまった場合の影響や責任を学ぶ機会をもち、最終的なマニュアルの完成をめざす予定だ。マニュアルの普及によって、高校における交通安全教育の定着が期待される。

ここで、人への思いやりや命の大切さに気づいてもらうためのものがある。マニュアルでは、実際に生徒たちが加害者となった自転車事故の事例をもとに生徒同士が話し合い、自ら考えることで行動変容を促す指導方法を取り入れている。

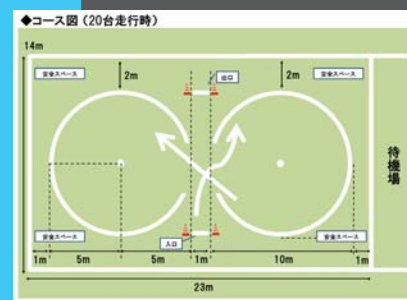


感受性教育も1時間で行えるカリキュラムで、クラス単位のホームルーム学習に適している

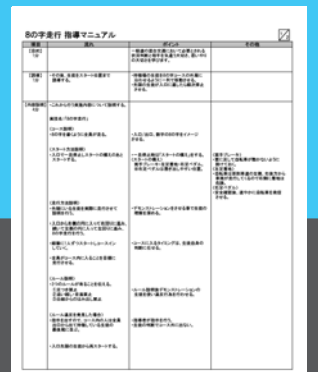
## 今回作成した高校生交通安全教育指導マニュアルの構成



各実技の「集合」「誘導」「内容の説明」「デモンストレーション」「実走行」「まとめ」などについて映像で解説



映像だけでなく、各実技のコース設定や進め方、指導のポイントを解説した資料、感受性教育の指導案と生徒用のワークシートなども収録されている。

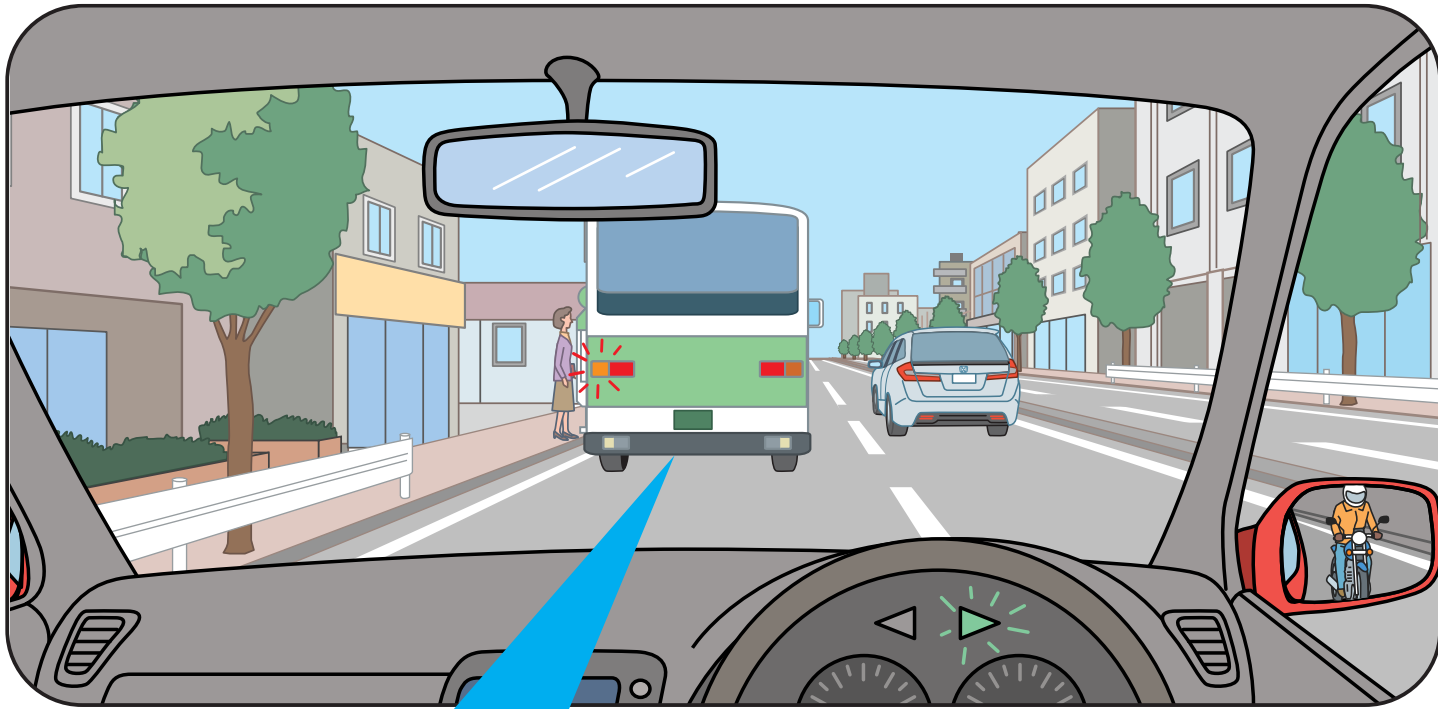




危険予測トレーニング(KYT) — 危険感受性を育てる

第44回 右側の車線に進路変更する時(四輪車編)

交通事故を防止するためには、路上で出会うさまざまな危険を予測することが大切です。このコーナーでは危険感受性を高めるための題材を提供します。今回は四輪車のドライバーに、右側の車線に進路変更する時の危険について考えてもらうためのKYTです。



あなたは片側2車線の道路を走っています。前方を走行しているバスが停車したので、右側の車線に進路変更しようとしています

安全に通過するには、どのようなことを予測する必要がありますか？

©本田技研工業(株)

活用方法

- ① 少人数のグループをつくります。
- ② 「交通場面のイラスト」を見せながら、意見を出し合います。
- ③ その後、「解答・解説※」を参考にして、どんなことに気をつけて運転すれば良いか再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト(カラー・A4版)」は下記SJホームページでご覧いただけます。またPDFファイルもダウンロード(無料)できます。

ホンダ SJ

検索

【使用上の注意】

- 営利目的での利用はおやめください。
- 内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
- その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。

本田技研工業(株) 安全運転普及本部  
TEL: 03 (5412) 1736  
E-mail: sj-mail@spirit.honda.co.jp

指導者ファイル 25

このコーナーでは、地域で活躍する交通安全教育に携わる指導者の方々を紹介していきます。



徳島県の交通安全教育指導員でつくる「ひまわり劇団」の皆さん  
写真左から、石井清子さん、馬木智也さん、小松邦子さん、武田君代さん、兼田美鈴さん、緒方雅子さん、里村真澄さん、川辺たまきさん

担当地区の垣根を越えて 結成した劇団による啓発活動

徳島県では交通安全教育指導員13名が11地区に分かれて日々啓発活動に取り組んでいる。「ひまわり劇団」は平成19年に徳島県の交通安全教育指導員の有志によって結成された。「高齢者の死亡事故が目立つようになってきた時期で、誰もが高齢者の事故を防ぐために何かをやらなければいけないと考えていました。しかし、1地区に一人の指導員では、できることに限界があります。そこで、地区の垣根を越えて、劇団を立ち上げ、高齢者が親しみやすい寸劇による交通安全啓発を行うことにしたのです」と、武田君代さんは振り返る。「劇団の活動を通じて、他の地区の指導員と協力し合えるようになりました。もちろん、各指導員が所属する自治体や警察署の理解のおかげです」。

寸劇の内容は笑いを交えながら、道

路横断時に注意してほしいことや、夜間の服装や反射材の着用を伝えている。「指導的な感じにならないように、地元の方言である阿波弁を盛り込むなど、セリフも工夫しています」。劇団の公演数は年100回を数え、会場も神

社の境内から1000人規模の会場まで様々だ。

「呼んでいただければ、県内のどこへでも行きます。高齢者の死亡事故を減らすために、これからも熱い想いで演じていきたい」と武田さんはいう。

★高齢者交通安全教室での「ひまわり劇団」の公演



演歌歌手のコンサートに向かうバスの中という設定で、車窓から見える歩行者や自転車の危険な行動を、高齢者役の武田さんとバスガイド役の石井さんが軽妙なやりとりで指摘していく

★「ひまわり劇団」の皆さんが 各々の交通安全教室で活用している教材



徳島県オリジナルの「交通安全・阿波弁かるた」。「あ」の「あるでないで」は「あるじゃないか」を意味する方言

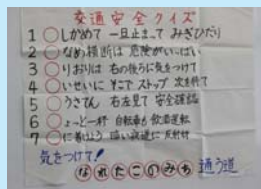


2つの牛乳パックを使った手づくりの「からくりボックス」。牛乳パックに巻きつけられたイラストや標識などが15個出てくる

「正」の字を見せ、「この中に正しい交通ルールが隠れていますが、何でしょう?」と問いかける。「正」の字の頭の横線を離していくと「一」と「止」で「一度止まる」に



高齢者向けの「交通安全クイズ」。7個の答えの文字を組み合わせると「なれたこのみち」に



指導者の皆さんの活動を動画で紹介  
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/area/movie/>

SJクイズ ?

Q1 平成26年の交通死亡事故件数(4013件)を事故類型別にみると、最も多いのは次のうちどれでしょう?

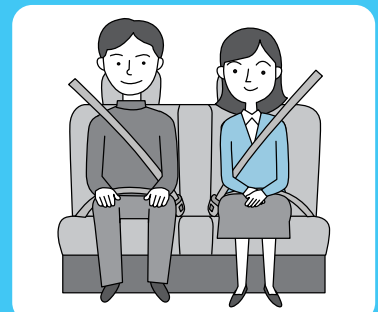
- ① 人対車両事故の横断中
- ② 車両相互事故の出会い頭衝突
- ③ 車両相互事故の正面衝突
- ④ 車両単独事故の工作物衝突

Q2 平成26年の原付以上運転者(第1当事者)による交通死亡事故件数について法令違反別にみると、最も多い違反は次のうちどれでしょう?

- ① 最高速度
- ② 運転操作不適
- ③ 脇見運転
- ④ 漫然運転

Q3 平成26年の警察庁とJAFによる調査では、一般道路において後部座席同乗者のシートベルト着用率は何%だったでしょう?

- ① 約25%
- ② 約35%
- ③ 約45%
- ④ 約55%



※「解答」は8面下。「解説」は下記SJホームページでご覧いただけます。<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/sj/>

©本田技研工業(株)



安全な道路環境をめざして 7

# SAFETY FOCUS

## 自転車利用者による信号無視が目立つ交差点

### ●この地点で発生した事故件数

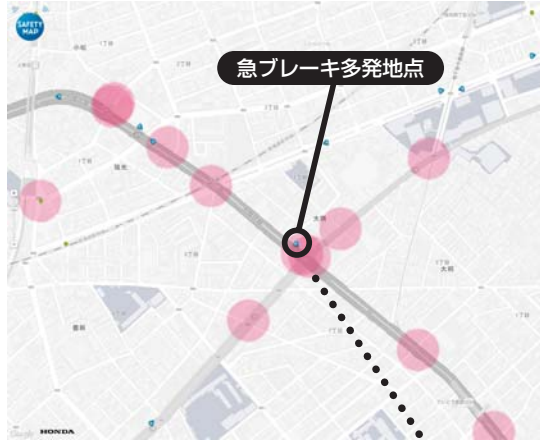
事故類型	件数
四輪車対自転車 (左折時)	2
四輪車対四輪車 (追突)	2
四輪車対四輪車 (正面追突)	1

※平成26年中、大阪府警察本部提供

### ●「SAFETY MAP」みんなの意見

危ないと感じる理由	そう思う人
歩行者/自転車の飛出しが多い	4人
スピードが出ているクルマが多い	2人

※平成27年3月31日時点



「SAFETY MAP」の表示

「SAFETY MAP」には「みんなの意見」として一般投稿された危険スポット情報が地図上に表示されている。今回「FOCUSエリア」(下図参照)に取り上げるのは、大阪府内で5人の方が「みんなの意見」を投稿している大桐2丁目の交差点だ。ここには、歩行者/自転車の飛出しが多い(4人)、スピードが出ているクルマが多い(2人)という投稿が寄せられている。また、急ブレーキ多発地点の表示も出ているこの場所では、平成26年中に交通事故が5件発生しており、そのうち2件はクルマ対自転車の事故となっている。

「SAFETY FOCUS」は、ホンダが公開している「SAFETY MAP」に示される交通上の危険が潜むスポットに足を運び、現場の交通環境と事故防止について考察する連載記事です。

## 現場をたずねる

今回訪れた大桐2丁目交差点は、大阪内環状線と府道16号が交わる交通量の多い場所。ドライバーに横断しようとする歩行者や自転車の存在がわかりやすいよう、交差点の角にある植え込みの高さを低くしていた。

現場を訪ねた平日朝7時半は車道を往來するクルマが多いことはもちろん、阪急線上新庄駅方面に向かう通勤・通学の自転車利用者や歩行者が多く行き交っていた。

通勤・通学の自転車利用者や歩行者のほとんどは深江橋および高槻方面から吹田方面に進んでいた。車道は交通量が多いため、自転車利用者の多くは歩道を走行していたが、車道の様子を伺うことなく横断歩道を通過していたほか、自転車・歩行者専用信号の表示を無視しての横断が後を絶たなかった。

また、歩行者や自転車利用者が横断歩道(自転車横断帯)を通行中でも、十分に減速せずに、左折して交差点を通過するクルマも見られた。

なお、現場では早朝から警察官による赤色信号無視で横断する自転車利用者などに対する指導取締りが行われていた。

### ●この地点を通過する自転車の状況(台数)

信号遵守		危険運転		
青点減で進行	赤信号で進行	二人乗り	イヤホンヘッドホン	携帯電話使用
23	82	5	25	16

※観察日：平成27年3月25日 午前7時30分～午前9時

### FOCUS エリア 大阪府大阪市東淀川区大桐2丁目交差点



信号が青になる前に多くの自転車が交差点内へ進入



高槻方面から斜め横断してくる自転車



赤信号で進入した自転車利用者と右折車両が接触しそうな



イヤホンをしたまま赤信号で横断歩道を渡る自転車利用者



交差点の角にある植え込みも背の低いもので、ドライバーが歩道を通行する自転車や歩行者を確認しやすくなっている

## 交差点進入時の安全確認を徹底する

現場で危険を感じたのは、自転車利用者の信号無視だ。自転車・歩行者専用信号が赤になってから横断するだけでなく、青になるのを待ちきれずに横断する自転車も多かった。1台が信号を無視して横断を始めても、周囲の自転車も連鎖して渡り始めてしまったため、一度に9台の自転車が信号を無視した横断をする場面もあった。赤信号になってからの無理な横断によって、右折矢印信号の青から赤の変わり目で右折するクルマと自転車が接触しそうな状況も、ヒヤリとする状況が何度となく見られた。

当然のことだが、自転車利用者は自転車歩行者専用信号が赤の時は横断してはならない。一方、ドライバーは自転車・歩行者専用信号が赤になっても、突然自転車進入してくることを予測して、横断歩道(自転車横断帯)手前では徐行し、場合によっては一旦停止することが必要だ。そして、自転車や歩行者が来ていないことを確かめて通過してほしい。

## 自転車利用者の信号遵守が重要

現場の道路環境は交差点内が見通しが良く、車線整備や信号の切り替わりも実情を反映されているように感じられた。そのため、ドライバー、自転車利用者、歩行者が油断してしまうのかもしれない。交差点内で見通しが良いため、自転車利用者は赤信号で進入しても自分の存在をドライバーが見つけて、クルマのほうが目止まってくると思ってしまうのだ。

歩行者・自転車とクルマの通行を信号機によって完全に分離するという対策も考えられるが、信号無視をする自転車が多い場所では、ドライバーへの一層の注意喚起や自転車利用者の違反に対する取締りの強化が有効といえるだろう。

大阪府警察では、4月1日に警察として全国初の自転車対策の専門部署である「自転車対策室」が発足した。今後、府警は本実態もふまえ、自転車利用者へのルール周知や違反取締りなどの安全対策を強化していく考えだ。

「右にちゅうい」と横断歩道に書かれた歩行者と自転車利用者向けの注意喚起表示



自転車の二人乗りや幼児ヘルメット未着用が目立った



自転車は「歩行者・自転車専用」に従わなければならない



「SAFETY MAP」のご活用・ご参加をお願いします!

ホンダ セーフティマップ

<http://www.honda.co.jp/safetymap/>

「SAFETY MAP」は「みんなで作る安全マップ」です。Hondaのインターナビが集めた日本中を走るクルマの急ブレーキ情報と、交通事故情報、そして皆さんの声で地図はつくられます。お手持ちのPC・スマートフォンからアクセスできますので、あなたの周囲に危ないと感じることのある場所があったら、情報を投稿してください。